

樹木と絵画の交差点

第 17 回 ～ルドゥーテとアジサイ～

ピエール=ジョセフ・ルドゥーテ (1759-1840) は、18 世紀末から 19 世紀にかけて活躍したベルギー出身のフランス宮廷画家です。「バラの画家」「花のラファエロ」と評されたルドゥーテは、植物を愛し、植物図学に生涯を捧げました。ナポレオン皇妃ジョゼフィーヌが集めた多種にわたるバラを描いた『バラ図譜』は人々に支持されて、今も出版され続けています。ルドゥーテは当時の版画技術を改良して細やかな質感を表現し、植物画を単なる記録としてではなく一つの美しい作品として完成させました。



ピエール=ジョセフ・ルドゥーテ (1759-1852)

ロサ・ケンテフォーリアとアネモネとクレマチス (『美花選』 1827-33 年より)

18-19 世紀にかけてフランス王室・皇妃付きの画家となり、多くの植物画を残しました。正確な描写ときめ細やかな花卉や葉の質感は「バラの絵といえばルドゥーテ」と評されるほどです。

博物館蒐集室付素描画家

ルドゥーテはフランス配下のベルギーに生まれ、18 歳の時に画家修業のためパリに出ました。装飾画家としての仕事の傍ら王立植物園へのスケッチに通っているうちに、植物学者の知己を得て植物画の仕事をするようになります。当時、植物学者やプラントハンターはヨーロッパから世界中に向けて旅立ち、珍しい品種を見つけては、王立植物園などに持ち帰りました。パリ郊外には大規模な苗圃や花卉園ができるなど、パリ市民の園芸熱は盛り上がっていました。

フランス革命前の 1789 年、ルドゥーテは王妃マリー・アントワネットから“博物館蒐集室付の素描画家”に任命されます。博物学の基本手法は収集・分類して記述すること。植物園や博物館に収集された新種の植物や動物、魚類は写生画から版画に起こして記録されました。種を見分けるための正しい観察は正確な図版によるところが大きく、優秀な素描画家が要請されていた時代でした。ルドゥーテはそんな中、卓越した描写力でたくさんの植物図版を残していきます。



Lilium candidum
(『名花選』
1827-1833 年より)



Lilium superbum
(『ユリ科植物図譜』
1802-1816 年より)



Musaxparadisiaca
(『ユリ科植物図譜』
1802-1816 年より)

バラ図譜

その後フランスではナポレオン 1 世による帝政が敷かれました。ナポレオン皇妃のジョゼフィーヌは、本名をジョセフ・ローズといい、バラに縁がある人物です。ジョゼフィーヌは、居住するマルメゾンの館の庭に珍しいバラや美しい花を集めて栽培し、植物の保護をはじめました。園芸家にバラの品種改良をさせて、様々な品種を植物誌に記録したのです。その後ヨーロッパでバラ栽培と育種が進み、オールドローズからモダンローズへと続く現代バラ栽培への発展は、ジョゼフィーヌの功績が大きいといわれています。ジョゼフィーヌはルドゥーテの作品を購入し、ルドゥーテはジョゼフィーヌの話し相手になるなど次第にお気に入り画家になっていったといわれています。この出会いを介して、名高い「バラ図譜」が生まれました。

この頃は版画技術の進歩の過程にあり、博物写生図の手法は木版からより鮮明な銅版画へ移ってきています。ルドゥーテは銅版画のエングレーヴィング技法(点刻彫板)で、線描を用いずに点の粗密で画面の明暗を表しました。気が遠くなるような細かい作業です。従来の木版だと 4 色刷りの場合は 4 枚の版木が必要ですが、銅版画の多色刷りにした場合は 1 枚の版で済みます。さらに印刷の上から手描きで彩色を加える手法で、水彩画のみずみずしさ、花卉や葉の柔らかさなど、より自然に近い花の姿を表現することができました。19 世紀に写真が発明されるまではこのような版画職人たちの高い技術を結集して図誌・図鑑が作り上げられました。「バラ図譜」全ての図版には、原画を描いたルドゥーテの他、彫り師、刷り師の名前が記されています。



Rosa centifolia foliacea
(cabbage rose)
(『バラ図譜』
1817-1821 年より)



Rosa moschata
(musk rose)
(『バラ図譜』
1817-1821 年より)



Rosa clinophylla
(『バラ図譜』
1817-1821 年より)

アジサイの物語

日本産のユリ(ヤマユリやカノコユリ)と同じように、アジサイもヨーロッパのプラントハンターが日本から持ち帰ったものだといわれています。アジサイはヨーロッパでは“東洋のバラ”と称され人気を博し、18 世紀末には育種や品種改良が盛んに行われました。

その頃、ジョゼフィーヌにはナポレオンと結婚する前に生んだ(1783 年)「オルタンス」という名前の娘がいました。“オルタンス”はもともとラテン語に由来する女性の名前で、その頃上流社会で流行してい

たようです。そしていつからかヨーロッパでは“オルタンシア”は「アジサイ」の通称となりました。その由来は、ある上流社会の女性からとられたもので、一説ではジョゼフィーヌの娘の名からともいわれています。ナポレオンの戴冠式のジュエリー制作を手掛けたフランスの老舗宝石店ショーメには、ジョゼフィーヌと娘のオルタンスにちなんだ“オルタンス”というシリーズがあります。アジサイモチーフの他、花を愛したジョゼフィーヌにちなんで植物をモチーフにした有機的なデザインのジュエリーは、今も人々を魅了します。

鎖国中の長崎・出島のオランダ商館に医師として滞在した、ドイツの医師フィリップ・フランツ・シーボルトもアジサイに縁の深い人物です。シーボルトは医者である他、植物学の研究者でもありました。出島に植物園を作り、1,400種以上の植物を栽培するほどの熱心さでした。日本の植物や動物・植物標本を大量に採集・収集しオランダに持ち帰ったシーボルトは、帰国後に『日本植物誌（フローラ・ヤポニカ）』を出版します。その中で、アジサイ科の植物を16の図版で紹介し、アジサイを“*Hydrangea otaksa* (ハイドラングア オタクサ)”と命名しましたが、アジサイの学名はシーボルトが命名する以前に“*Hydrangea macrophylla* (ハイドラングア マクロフィラ)”という名前で発表されていたため、オタクサとしての学名は認められませんでした。“*Otaksa*(オタクサ)”とはシーボルトが日本で一緒に過ごした女性「お滝さん」から付けられた名前といわれています。“オルタンス”や“お滝さん”などのエピソードが物語るように、アジサイは儂げな女性の面影を想起させるようです。



hortensia

(『名花選』1827-1833年より)

アジサイは当初ヨーロッパでは「東洋のバラ」と称賛されました。アジサイを見慣れた私たちからすると“バラ”とは少し系統が違うようで、意外なような気がしますが、ヨーロッパでの花色は赤やピンク色が多いということなので(アルカリ性の土壌が多いため)、ピンクの花色からバラを連想したということだったのかも知れません。ちなみにシーボルトが編纂した「日本植物誌」のアジサイ図版の花弁は、日本で描いた下絵を使ったためか、青紫色で描かれています^{※注}。

ルドウーテの描写は、触れることができそうなくらいに柔らかく繊細で、アジサイを包み込む穏やかな空気まで感じ取れるようです。手前の大きな葉は周りの光を受けて色んな角度へ反射し、光溢れる周囲の空間を暗示しつつ、優美な花房を引き立てています。

アジサイについて

アジサイはアジサイ科アジサイ属の落葉低木の一つです。原種は東アジア～東南アジアが主産地で、そこから中近東～ヨーロッパに伝播していったものと考えられています。

東日本大震災から11年が経ちました。被害に遭われた方々はもちろんのこと、被害に遭わなかった人も、ニュース映像を通して災害の痛ましい記憶がいまなお心に刻まれているのではないのでしょうか。

沿岸から遠く離れた福島県の内陸で起こったダム決壊災害と、ダム底に生き残ったアジサイの話を
ご存じでしょうか。福島県須賀川市長沼地区の農業用「藤沼ダム」は、2011年3月、東日本大震災により本堤が決壊しました。下流域では7人が死亡、1人が行方不明の被害を受け、震災前は観光地で賑わっていたダム周囲のレクリエーション施設が壊滅状態となりました。その2年後、犠牲者の



写真1 藤沼湖底のアジサイ

追悼を込めて地元住民らが水のない湖底を歩く催しを行った際、偶然ヤマアジサイの群生約 300 株を見つけました（写真 1）。震災前の何年間か湖底にあった株が芽吹いたものではないかといわれています。地域の人々はこのヤマアジサイを「奇跡のアジサイ」と名付け、畑に移植してアジサイ畑を作り（写真 2）、移植から 3 年後には初めて花を咲かせました（写真 3）。以後、長沼在住の深谷武雄さん（藤沼湖自然公園復興プロジェクト委員長）は株を増やし、復興を応援する人々に贈り続け、全国にアジサイの「里親」の輪が広がっていきました。



写真2 「奇跡のアジサイ」の苗畑

2017 年 1 月に藤沼ダムの復旧が完了し、同年 6 月には藤沼湖自然公園でアジサイの植樹祭が行われました。全国からアジサイの里親が集い、アジサイを湖畔に植樹して復興を願いました（写真 4）。新聞に掲載された「奇跡のアジサイ」の記事は、北海道から沖縄にいたる全国各紙で伝えられて栽培の輪が広がり、現在里親の数は千名以上にのぼります。

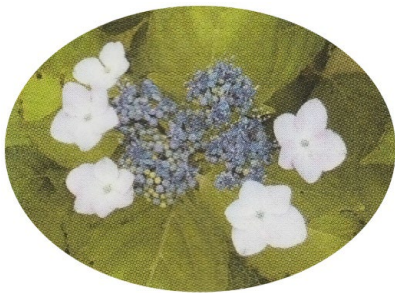


写真3 「奇跡のアジサイ」開花



写真4 「奇跡のアジサイ」植樹祭の様子

※注：

シーボルト編 「日本植物誌」P.52 アジサイ(‘オタクサアジサイ’) 図版
アジサイ図版の下絵は、シーボルトが開いた私塾「鳴滝塾」の日本人門下生が長崎で描いたといわれる。



《参考文献》

「バラ図譜〔普及版〕」ピエール＝ジョセフ・ルドゥーテ著 河出書房新社 2012年
解説：「ルドゥーテ『バラ図譜』について」上田善弘著
「バラの画家 ルドゥーテ」シャルル・レジエ著 高橋達明訳 八坂書房 2005年
「日本のアジサイ図鑑」川原田邦彦、三上常夫、若林芳樹著 柏書房 2010年
「シーボルト 日本植物誌」大場秀章監修・解説 ちくま学芸文庫 2007年

《参考URL》

町田市国際版画美術館 HP “ステイプル・エングレーヴィングとメゾチント”
<http://hanga-museum.jp/exhibition/past/2017-345> (参照 2022-7-14)
農耕と園芸 online カルチベ 園藝探偵の本棚
“第20回 西洋アジサイはすべて「日本のアジサイ」からつくられた～山本武臣『アジサイの話』”
<https://karuchibe.jp/read/5146/> (参照 2022-7-14)
神戸市森林植物園 アジサイ情報センターHP “アジサイとシーボルト”
<https://www.kobe-park.or.jp/shinrin/ajisai/arekore/arekore07/> (参照 2022-7-14)

《参考記事》

長沼商工会・藤沼湖自然公園復興プロジェクト委員会発行チラシ

《写真提供》

長沼商工会・藤沼湖自然公園復興プロジェクト委員会